クラブ職業奉仕委員長会議報告

地区職業奉仕委員会
委員長 畑田　耕一
（豊中RC）

本年度のクラブ職業奉仕委員長会議は8月30日午後、ホテルヴィアーレ大阪で開催され、横山G、大谷GE、松本GN、松本、樋上、矢野、岡本４ガバナー補佐のご出席のもと、大阪大学名誉教授・前総長宮原秀夫氏とパストガバナー神崎茂氏にご講演を頂きました。

宮原氏は、「情報技術の光と影」について話を進め、先ず、現在のようなコンピューターの発達した情報化社会では、人間同士のコミュニケーションが希薄になる恐れがあり、情報専門家の責務は、フェース・ツー・フェースのコミュニケーションが促進されるような情報システムを作ることであると強調されました。

「電子メールはあくまでも電子的な情報交換で、フェース・ツー・フェースのコミュニケーションではありません。電子メールでは、人格が変わるとまでいわれます。情報伝達のうち、言語の果たす役割は10%程度で、残りは、声、顔の表情、身振りなどだといわれます。本当に真意を伝えるには、フェース・ツー・フェースのコミュニケーションが必要なのです」という宮原氏の言葉をかみ締めたいと思いました。

インターネットによる情報検索では、順位の後のほうの情報は殆ど見られることがなく、実際に読まれる情報は全体の僅か0.001%という報告もあります。かなりの意見分布がある場合でも、何かの拍子に上位にランクされた意見だけが強調されて、実際は少数の意見によって、多数の人達が引っ張っていかれるというような事態が生じかねないのです。今見ている情報は全体の0.001%かもしれないという認識を持つことが必要です。また、特定のキーワードによる検索ではノイズと見做されるような情報が、知的活動の大きな発展に役立つこともあります。情報システムに頼り切るのは極めて危険です。情報化社会を生きるには、自分の専門分野だけでなく、他分野のこともよく勉強して、システム全体を評価できる、バランス感覚をそなえ、マネージメント能力があり，グランドデザインのできる力を身につける必要があるのです。

人や他の生物は、神経の情報伝達速度や記憶素子の数という点では、大型コンピューターにはるかに劣るのに、コンピューターにはまねの出来ないいろいろな機能を発揮します。その際に消費するエネルギーもコンピューターに比べて桁違いに小さいのです。それは何故なのか？を調べようとして始められた、情報科学と生命科学の融合によって新しいパラダイムを生み出そうとする「大阪大学ゆらぎプロジェクト」の目的とその最近の成果についても紹介され、情報科学、生命科学、ナノ領域の融合による新分野開拓への希望を語られました。宮原氏の結びの言葉は「情報通信とは、情に報い、信

を通じること」でした。

次いで、パストガバナー神崎茂氏は、「職業奉仕の精神と実践」について、ガバナー月信7月号掲載のご自身の記事、「職業奉仕を語る（Ⅰ）江戸時代の商人道とロータリー」に基づいてお話されました。

日本の歴史と文化の中には西欧文化をしのぐ優れた思想や文化がたくさんあります。江戸時代の繁栄の背景にも優れた日本文化が生きていました。商家の番頭から「人の人たる道を究める」識者の道を進んだ石田梅巖（1685－1744）は、「売物には念を入れる」、「少しも粗相せずに売り渡す」、「富の主は天下の人々なり」などロータリー精神を表す言葉と全く同じ意味に受け取れる言葉を残しています。近代経済学の祖と云われるアダム・スミスの「国富論」（1776）の約40年前のことです。

行商から始まった近江商人の言伝えの中にある「三方良し ― 売り良し、買い良し、世間良し」や「先も立ち、我も立つ」もロータリーの奉仕の理念に繋がる言葉です。資本主義の行きづまりを脱却する理念が日本に於けるロータリー活動の中で生まれて来ても良いのではないかと思われます。

神崎氏は、お話の最後を「アーサー・シェルドンが『Service』と『職業奉仕』の理念を提唱してから100年、ロータリーの真髄ともいえる古典的職業奉仕の考え方が薄れて、慈善活動でその存在価値を高めようとしていると、多くの日本のロータリアンが感じ始めている今、綱領の中核である職業奉仕の理念の再構築によるロータリーの改革を、日本のロータリアンによって始めるべき時であると思考します」と結ばれました。

神崎氏は、また、平成20年7月3日、島根県雲南市立吉田中学校3年生に、総合的な学習の一環としての「生き方学習」で、「何故勉強が必要か？　何故働くのか？」と題して行われた出前授業の成果について報告され、あわせて、各クラブでの出前授業の実施を呼びかけられました。

お話はそれぞれに興味深く、質問、意見も活発に出て、職業奉仕を考える有意義な会議でした。